



※都市景観賞に関する活動に参加した学生の皆さん（敬称略）中井賢一、龍田広和、日出 剛、矢部大智（九州大学大学院）、清水大輔（九州大学）、村上明生（九州芸術工科大学大学院）、生見臣司、渡邊健二郎（九州産業大学大学院）、河原 淳、谷山雅央、安藤嘉祐、山近洋子、楠原由西、後藤和政、近藤岳志、満原千恵、青柳由美、川原英純（九州産業大学）、上井孝仁、段原陽介、織畑知子、石井真理、川橋紗貴、川島由西、大宅充和子（福岡大学）

「都市景観賞は外観だけで選ばれる？」 「福岡らしい景観とは？」

—福岡市都市景観賞審査委員VS学生有志の議論から—

専門家の集まりである都市景観賞審査委員会に市民感覚に近いものを持ち込み、市民にわかりやすい賞にしよう、昨年（第12回）初めて、市内大学で建築やデザインを学ぶ学生の有志に市民から推薦された作品の模擬審査と審査委員会でのプレゼンテーションもしてもらった。今回も同様に学生有志の自主的な活動として都市景観賞審査過程への参加を呼びかけたところ、学生側からは市民の推薦作品に限定せず独自の観点によって福岡のまちの景観を検証する活動が提案された。彼らは「立ち止まる景観」「福岡らしさ」をキーワードに検証を進め、具体的な建築物やまちなみにとどまらず景観に対する「視点」の議論を行ったが、この取り組みを通じて都市景観賞の制度や審査のあり方、また景観を考える際の姿勢などについての疑問を事務局にぶつけてきた。そこで、事務局職員も含め、都市景観賞審査委員と学生が一同に集まり今後の都市景観賞の方向性を議論する場を設けることになった。

学生側から提示された疑問は①都市景観賞を建造物の外観だけで評価するのは問題があるのでは？②「福岡らしさ」をとどう捉えたらよいのか？③一般公募なのに推薦ハガキの多少にかかわらず審査委員会で受賞作品を決めるのはなぜ？④作品に対する評価をもっと少し具体的に公表すべきでは？⑤実施要領にある「推薦の視点」には周辺環境との関連性やまちなみの調和といった表現があるのに「推薦対象」として例示されているものは個々の建造物になっただけで「都市景観賞」の内容があいまいでは？（14ページ参照）の5点。これに対し審査委員側からは、都市景観賞は景観向上の努力をしている人・団体を表彰する制度であり、市民の推薦といふふいふにかけられたものを

専門家の見識によって選ぶというシステムが受賞に心ざわしいと多くの人に認められる作品の選考につながる。また、審査委員会で議論は外観の評価にとどまらずその作品の立地や背景、そこに関わる人の活動まで考慮して行われていることなどの説明がなされた。

「でも、景観賞受賞作品のマップは外観の互見と場所しか載ってないので、外観で判断してるとかと思ってました」「募集リーフレットを見て審査委員がそこまで議論していることは伝わりませんよね」というのが学生側の意見。学生だけでなく多くの市民の方に都市景観賞の意図するものがまだうまく届いていない可能性も大きいわけ、募集や受賞作品決定の広報などについて事務局が今後の課題をいただいた。

また、②に関連して「福岡の景観はカメラのようなものでコントロールは必要ないが、高いレベルのデザインが求められる」「福岡らしさを各人がそれぞれの読みとり方で考えることがおもしろい景観づくりにつながるのでは」「今回の受賞作品に表れたように、時間の要素を考慮することは大切」「そのものが国田とのつながりの中でどういう意味を持つのか、地域景観をきちんと捉えたうえで福岡らしい景観についてのヒジヨンの提示が必要」などの意見が審査委員から出された。

賞のあり方についてはこれまで多少ずつ改良を重ねているが、市民の景観に対する考え方の変化や深まりを反映できるように、これからも検討を続けていきたい。また、今回のような都市景観賞を材料とした学生の自主的な活動が福岡のまちの景観を考えるもっと大きな動きへとつながっていくてほしいと期待している。